欽定英訳聖書における動詞 *Eat*(*e*) の文法

盛　田　義　彦

A Grammar of *Eat*(*e*) in the Authorized Version of the Bible

Yoshihiko MORITA

Abstract

This paper deals with some aspects of behavior of *eat*(*e*) and several set phrases including *eat*(*e*) in the Authorized Version of the Bible published in 1611. The main findings after discussion are as follows:

1. The preterite form of *eat*(*e*) is periphrastic in almost all the cases, i.e., *did/didst eat*(*e*);
2. The verb connected most often with *eat*(*e*) by *and* or (*n*)*or* on its right side is *drink*;
3. The noun used as an object of *eat*(*e*) most often is *bread*;
4. The *of* in a set phrase *eat*(*e*) *of* is almost always partitive *of*;
5. The phrase *one's fill* in a set phrase *eat*(*e*) *one's fill* is an adverbial, and the set phrase is not Hebraism;
6. A set phrase *eat*(*e*) *the labour of one's handes* as well as *eat*(*e*) *one's own flesh* is Hebraism.

0　はじめに

Scotland 王であった James VI は、1603年 3 月24日早朝に他界した Elizabeth I の後継者として選出された。これを受け入れて 4 月 5 日 Edinburgh を出立し、London に向かい、約一ヶ月の旅の後、5 月 7 日に London に到着した[1)]。途中、新王に対する複数の請願が行われたが、いわゆる「千人請願（The Millenary Petition)」は 4 月の末ないしは 5 月の初めに行われた。これらの請願事項を処理するために、戴冠して[2)]James I と

なった王は翌年の1604年ロンドン郊外の Hampton Court で宗教会議を開いた。この会議は1月14日から16日まで、3日間にわたって行われ、その第2日目に扱った議題が聖書の新しい訳出であった。王はこの案件を審議し、裁可した。James 王の裁可が出されてから数ヶ月後、6班に分れて訳出作業が開始され、数年にわたる綿密な作業の成果として1611年に出版された英訳版が The Authorized Version（以後 AV）である。

本小論では AV に現れた動詞 eat(e) の振る舞いを中心に、公刊済みの「KING JAMES NEW TESTAMENT における動詞 *Eat* の文法」[3)]で得た知見の一部を加えて記述する。

1　Eat(e) の用例数と綴り字

1.1　用例数

Eat(e) およびその変化形の用例数は以下の通りである。

表1　eat(e) の用例数

		旧約聖書	新約聖書	合計
定　形				
eat(e)		86	29	115
eatest	単数2人称形	3	0	3
eateth	単数3人称形	32	11	43
ate	単数2人称以外の過去形	2	1	3
	合　　計	123	41	164
非定形				
eat(e)	不定詞	434[4)]	106	540
eaten	過去分詞	93	12	105
eating	現在分詞	9	7	16
eating	動名詞	9	2	11
	合　　計	545	127	672
	総　　計	668	168	836

eat(e) はその変化形も含めて総用例数は836である。その内訳は、旧約部分で668、新約部分で168であり、旧約と新約の用例数の比はおよそ、4対1となる。すなわち、用例の約80％が旧約部分にある。定形、非定形で分ければ、定形164、非定形672であり、その用例数の比はおよそ1対4である。換言すれば、用例の約80％は非定形であり、その内の約80

%が不定詞である。不定詞の内訳は旧約で434、新約で106であり、用例数の比は4対1となる。すなわち、用例の約80%が旧約にある。

定形の語形について観察すると、eat(e) が115例で、全定形の70%であり、単数3人称形 eateth が43例で26%となる。単数2人称形 eatest は極端に少なくて3例、過去形 ate も3例のみである。なお、過去単数2人称形の atest は用例が無い。

次に非定形の中を見よう。上述のように大部分（80%）が不定詞である。過去分詞 eaten は105例で16%、現在分詞 eating は16例で2%、動名詞 eating は11例で1.6%しかない。

1.2 綴り字

今日の綴り eat は欽定訳聖書では eat と eate の2種類として現れる。この二つの形について定形と非定形（＝不定詞）で分類してみよう。

表2　綴り字　eat と eate（旧約聖書）

	eat	eate	合　計
定　形	10	78	88
非定形	92	340	432
合　計	102	418	520

表3　綴り字　eat と eate（新約聖書）

	eat	eate	合　計
定　形	7	22	29
非定形	19	87	106
合　計	26[5]	109	135

今日の綴りとは異なる eate が旧約、新約どちらについても eat よりも頻度が高い。その比率は旧約で102対418でおよそ1対4となり、新約は26対109で、やはり1対4になる。従って、新約と旧約を合わせても、128対527でほぼ1対4である。すなわち、eate の方が eat より約4倍、頻度が高い。

eate も eat も定形と非定形で使われ、両文法形式間で二つの形が使い分けされているのでないことが判る。また、主語の人称や数、法、自動詞と他動詞、修飾語句の有無などについて両形を観察してみても、二つの間の

使い分けは観察できない。それでは語尾にeが付いたり付かなかったりするのは何故であろうか。

1.2.1 仮説と検証

上述のようにeateとeatの使い分けが文法形式によらないとすれば、どのようなことが考えられるのであろうか。次のような仮説を立てて検証してみよう。

仮説1　通常はeateが使われるが、eateが現れる行にスペースの余裕がない場合はeを取り去ってeatを使う。

eatが配置される行にeを加えるだけのスペースがあるかどうかを、eatが用いられている128箇所全てについて原典の各行を詳細に見て判断すると次表に示す結果になった。

表4　eatにeを加えるスペースの有無

	有	無	合　計
旧約聖書	9	93	102
新約聖書	3	23	26
合　計	12[6]	116	128

表4に整理した数字が示すように、eat形128例中、116例でeを加える余裕は見られなかった。もしもeを加えれば、行末の単語を分節してハイフン[7]を置き、残りを次行に移すか、行末の単語全体を次行に移すことになる。そのことによって次行の単語の配置が不自然になり、単語間のスペースが大きくなりすぎるなどの不都合が出てくる可能性がある。上記の数字116は、90%のeat形が仮説1を支持していると考えてよいであろう。それでは残りの10%にあたるeを挿入するスペースがある12例はなぜeを取らないのであろうか。そこで、第2の仮説を立ててみよう。

仮説2　欽定訳の直接の底本となったBishops' Bible（以後BB）の綴りの影響を受けた。

行中に十分eを加えるスペースがあるのにeat形を維持する12例につい

て BB に当たって調べてみると、12箇所全てで eate 形を用いていた。これによって仮説 2 は完全に棄却されることになる。なお、BB では eat はすべて eate の綴りであることが Chadwyck-Healey 社の CD-ROM による検索から判明した。それでは、この12例にはどのような説明を付けたらよいのであろうか。

仮説 3　原典で eat 形の該当語と eate 形のそれの間に違いがある。

AV で eat(e) と訳された語はヘブル語原典では原形で言うと אָכַל (ākal) と בָּרָה (bārāh) と לָחַם (lācham) の 3 種類がある。上記の旧約部分の 9 箇所はすべて ākal の変化形で書かれていた。ākal は eate 形の箇所でも多く用いられている。また、ギリシャ語原典では 1 人称単数直説法現在形で言うと、*βιβρώσκω* (bibrōskō) と *ἐσθίω* (esthiō) と *φάγω* (fagō) の 3 種類がある。上記12箇所中の新約部分の 3 箇所は esthiō で 2 箇所、fagō で 1 箇所書かれている。この 2 種類のギリシャ語も eate 形の箇所でよく使われている。このような結果から、仮説 3 も完全に棄却される。

仮説 4　1600年代初頭には伝統的な eate に対し、eat も使用された。

Shakespeare の 4 大悲劇と初期の作品 *The Tempest*、後期の作品 *Cymberine* の 6 作品について1623年の First Folio でどちらの形が使われているかを調べてみると、用例数は多くはない（16例）が、すべて eate 形であった。

AV の作成時期に重なる詩人・牧師の George Herbert（1593～1633）の全作品を扱う Concordance によると、eat が31回、eate が 6 回、使われている。また、劇作家・詩人 Ben Jonson（1573～1637）の詩作では eat 7 回、eate は 8 回、使われている。

上記の検証作業から、Shakespeare については仮説の 4 は棄却されるが、G. Herbert と B. Jonson については支持されることになる。

これまでの仮説と検証の結果として、eat 形は行中に e を付加するスペースが無い場合に選択され、ごくまれに e を加えるスペースがあっても、当時、広がり始めていた eat 形を、恐らくは特別な意味なしに訳出担当者、推敲者、あるいは植字工が用いたと推測してよいであろう。

2 語 形 (Conjugation)

2.1 定 形

eat(e) の定形は主語の人称と数、時制、法に応じて以下のようになっている。

2.1.1 現在時制

	直説法				仮定法	
	単数		複数		単数	複数
1 人称	I	eat(e)	we	用例なし	eat(e)	eat(e)
2 人称	thou	eatest	ye	eat(e)	eat(e)	eat(e)
3 人称	he/she/it	eateth	they	eat(e)	eat(e)	eat(e)

1 人称複数の主語を持つ eate の用例はない。

2.1.2 過去時制

	直説法				仮定法	
	単数		複数		単数	複数
1 人称	I	ate	we	用例なし	全て用例なし	
2 人称	thou	用例なし	ye	用例なし		
3 人称	he/she/it	用例なし	they	ate		

eate の過去形 ate は1.1で述べたように用例が少ない。その理由については3.8で考察する。また、ate は 1 人称単数と 3 人称複数の主語を持つ例しかない。仮定法の用例は皆無である。

2.2 非定形

eat(e) の非定形は表 1 にも示したが、繰り返して記しておく。

1) 不定詞　　eat(e), to eat(e)
2) 現在分詞　　eating
3) 過去分詞　　eaten
4) 動名詞　　eating

3 統 語 (Syntax)

3.1 否定文

主動詞eat(e)を含む否定文の用例を類型にまとめれば以下のようになる。

1) eat(e)＋not

(1) She … eateth not the bread of idlenesse. (Pr 31:27)
(彼女は…怠惰のパンを食べることはない。)[8)]

動詞の後に否定語を配置するこのタイプは古英語以来の伝統的な類型である。

2) 否定語を伴った主語＋eat(e)

(2) No man eate fruite of thee hereafter for euer. (Mar 11:14)
(今から後いつまでも、お前から実を食べる者がいないように)

3) Aux＋否定語を伴った主語＋eat(e)

(3) … : there shall no stranger eate thereof. (Ex 12:43)
(外国人はだれも過越の犠牲を食べることができない。)

副詞 there が文頭に置かれたので Aux が主語の前に移動している。

4) 否定語を伴った主語＋Aux＋eat(e)

(4) No soule of you shall eat blood. (Le 17:12)
(だれも血を食べてはならない。)

5) eat(e)＋否定語を伴った目的語

(5) … ye eat neither fat, nor blood. (Le 3:17)
(脂肪と血は決して食べてはならない。)

6) Aux＋否定語＋eat(e)

(6) A forreiner, and an hired seruant shall not eate thereof. (Ex 12:45)
(滞在している者や雇い人は食べることができない。)

(7) … ; therefore she wept, and did not eat. (1Sa 1:7)
(今度もハンナは泣いて、何も食べようとしなかった。)

この類型は多くの用例があるが、用いられる Aux は shall が多い。

7) Aux＋eat(e)＋否定語を伴った目的語

(8) Thou shalt eat no leauened bread with it: … (De 16:3)
(酵母入りのパンを食べてはならない。)

8) 否定語＋Aux＋主語＋eat(e)

(9) … , neither did he eate bread with them. (2Sa 12:17)

(彼らと共に食事をとろうともしなかった。)

否定語が文頭に配置されたことにより、主語と動詞句の一部が逆転している。eat(e) の過去形は did eat(e)（詳しくは後述）が一般的であるので、主語の前に Aux の did が置かれている。

3.2 疑問文

主動詞 eat(e) を含む疑問文は用例が極めて少ないが、次のような型がある。

1）疑問詞＋Aux＋(主語＋)eat(e)?

(10) For who can eate? (Ec 2:25)
(自分で食べて、自分で味わえ)

(11) Why doe ye eate and drinke with Publicanes and sinners? (Lu 5:30)
(なぜ、あなたたちは徴税人や罪人などと一緒に飲んだり食べたりするのか。)

2）疑問詞＋eat(e)＋主語？

(12) Why eateth your master with publicanes & sinners.[9] (Mat 9:11)
(なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか。)

この類型は do-support のルールが確立するまでの伝統的なパターンである。

3.3 否定疑問文

主動詞 eate を含む否定疑問文の用例は少ない。以下に示す 2 例の他に 1）のタイプがもう一例[10]ある。

1）did＋not＋主語＋eat(e)?

(13) ... , did not ye eat *for your selves*, ...? (Zec 7:6)
(あなたたち自身のために食べたり飲んだりしてきただけではないか)

否定辞 not の位置はまだ現代英語の場合のようになっていない。

2）疑問詞＋eat(e)＋主語＋not?

(14) ...? and why eatest thou not? (1Sa 1:8)
(なぜ食べないのか)

この文は主語と動詞の位置の逆転を行っており、do-support を用いていない。do-support の形を作ってみると次のようになる。

(15) Why doest/dost not thou eat?

この文の音調は(14)よりかなり悪くなる。これが do-support を採用しない理由であろう。

3.4 命令文

eat(e) を主動詞とした命令文の用例は多い。それらを類型化すると以下のようになる。

1) eat(e)

(16) Sonne of man, eate that thou findest: .... (Eze 3:1)
(人の子よ、目の前にあるものを食べなさい。)

このタイプの用例は命令文43例（旧約32＋新約11）中40例（旧約29＋新約11）に及ぶ。

2) eat(e)＋主語

(17) My sonne, eate thou honie, ... (Pr 24:13)
(わが子よ、密を食べてみよ、)

このタイプは旧約の 3 例[11)]のみである。

3.5 否定命令文

eat(e) の否定命令文を類別すると以下のようになる。

1) eat(e)＋not

(18) Eate not of it raw, nor sodden at all with water, ... : (Ex 12:9)
(肉は生で食べたり、煮て食べてはならない。)

このタイプは 4 例（旧約 3 ＋新約 1 ）[12)]ある。

2) eat(e)＋否定語を伴った目的語

(19) Eate no bread, and drinke no water; (1Ki 13:22)
(パンを食べるな、水を飲むな…)

このタイプではこの用例とほぼ同じものが 1 例[13)]ある。

3) eat(e)＋主語＋not

(20) Eate thou not the bread of him ... , (Pr 23.6)
(強欲な者のパンを食べようとするな。)

このタイプはこれ 1 例のみである。

4) 否定語＋eat(e)

(21) ..., neither eate any vncleane thing: (J'g 13:7)

(汚れた物も一切食べないように…)

このタイプは更に1例[14]ある。

3.6 仮定法

eat(e) が仮定法の語形で使われる文法環境は以下のごとくである。

1) lest 節

(22) And now lest he … eate and liue for euer: (Ge 3:22)

(今は、… 永遠に生きる者となるおそれがある。)

lest による副詞節では OE 以来、仮定法が用いられており、そのルールに沿った用法である。この用例の他に2例[15]ある。

2) if 節

(23) If any man eate of this bread, he shall liue for euer: (Joh 6:56)

(このパンを食べる者は永遠に生きる。)

if に導かれる条件の副詞節で、やはり OE 以来のルールが維持されている。この新約の用例の他に、旧約に1例、新約に3例[16]ある。

3) that 節

(24) Onely be sure that thou eate not the blood: (De 12:23)

(ただ、その血は断じて食べてはならない。)

命令文の中に埋め込まれた that 節中の仮定法である。これ以外にもう1例ある[17]。

4) vntill 節

(25) … : hee shall not lie downe vntill he eate of the pray, …. (Nu 23:24)

(獲物を食らい、… まで／身を横たえることはない。)

未来の不確実を表わす vntill (=until) 節で用いられた仮定法である。これ以外の用例はない。

5) whether 節

(26) The sleepe of a labouring man *is* sweete, whether he eate little or much: (Ec 5:12)

(働く者の眠りは快い／満腹していても、飢えていても。)

6) except 節

(27) Except yee eate the flesh of the sonne of man, … , yee haue no life in you. (Joh 6:53)

(人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に

命はない。)

except が節を取り、if … not に相当する意味を持っている。この節の中では、主語が yee であるので、eate は直説法か仮定法か語形からでは不明であるが、上記のように if 節に相当すること、及び、ギリシャ語原典の eat に相当する語が仮定法語形を取っていることから、この eate は仮定法形であると判断する。

3.7 希求法

(28) No man eate fruite of thee hereafter for euer. (Mar 11:14)

(今から後いつまでも、お前から実を食べる者がないように)

この用例は3.1節の(2)で既出のものであるが、意味は願望を表わし、eate の語形は仮定法形であるので、希求法の用例である。これ以外の用例はない。

3.8 迂言的過去時制

既述した (3.1) ように eat(e) の過去は ate もある (1.1.2) が、通常は did/didst (…) eat(e) である。どのぐらいの頻度数で両方が使われているかを見よう。

表 5　eat(e) の過去時制

	ate	did/didst (…) eat(e)	合　計
旧　約	2	84	86
新　約	1	32	33
合　計	3	116	119

過去時制を表わす形のうち ate は外典を除けば新約・旧約合わせて3例 (2.5%) あるが、迂言的過去形 did/didst (…) eate は116例 (97.5%) に及ぶ。

まず、ate による過去形を用いた例文を見よう。

(29) And I tooke the little booke out of the Angles hand, and ate it vp, …. (Re 10:10)

(わたしは、その小さな巻物を天使の手から受け取って、食べてしまった。)

この用例の ate it vp を did eate it vp にするとぎこちない音調になってしまう。

これが ate 形を選択した理由であろう。つぎに旧約の例を見よう。

(30) I ate no pleasant bread, ... (Da 10:3)

(一切の美食を遠ざけ、)

この用例では何故 ate 形を選択したかの理由が(29)のようには説明できないが、欽定訳の底本となった BB でもこの箇所は ate を用いており、その影響があったのは確かであろう。旧約のもう一つの ate の用例を見よう。

(31) They ioyned themselues ... : and ate the sacrifices of the dead. (Ps106:28)

(彼らは…を慕い／死者にささげた供え物を食べた。)

この用例では BB は did eate としている。欽定訳の訳者は BB には従わず、おそらくは ioyned という動詞に呼応させて ate という直接形を用いたのであろう。

つぎに迂言的過去形の用例を類型別にして頻度数を以下に示そう。

表 6　did/dist (...) eat(e) の類型

類　型	旧　約	新　約	合　計
did eat(e)	76	26	102
didst eat(e)	2	1	3
did Adv eat(e)	3	3	6
Adv did S eat(e)	3	1	4
did S eat(e)		1	1
合　計	84	32	116

did eate と didst eate は過去時制の表示という点では同じ類型として扱うことができると考えられるので、併せて考察する。

1) did / didst eat(e)[18]

(32) And the children of Israel did eat Manna fortie yeeres, ... (Ex 16:35)

(イスラエルの人々は、… 四十年にわたってこのマナを食べた。)

did eat(e) は旧約76例、新約26例で合計すると102例になる。didst eat(e) は2人称単数主語に対応する形であるが、旧約で 2 例、新約で 1 例ある。従って、この類型は105例になり、迂言的過去形の90%、すなわち、大多数はこの類型で現れる。この105例はすべて肯定平叙文中にあるので、Aux である did/didst は文法的には主に preterite tense marker の機能を果た

していると言える。

2） did Adv eat(e)

(33) I did neither eate bread nor drinke water, ... (De 9:18)

(わたしは…パンも食べず水も飲まず…)

この例文の did は past tense marker としてだけでなく、否定語 neither が存在するために使用されたとも考えられる。このような例がもう一つある (Ex 34:28)。

(34) And they did all eat, & were filled: (Mat 14:20)

(すべての人が食べて満足した。)

欽定訳には they all という collocation も珍しくないので、they all did eat も可能であると考えられる。すなわち、この用例では Adv の all が did を要求する要素にはなっていない。これと全く同じ用例が新約にさらに 2 箇所 (Mat 15:37, Mar 6:42)、Adv が continually の例が旧約に 1 箇所 (Jer 52:33) あるが、それによって did が必要になったとは考えられない。結局、(34)の類例 3 例を含め、全部で 4 例は did eat(e) の部類に入れてよいものと考えられる。

3） Adv did S eat(e)

(35) ... : yet did they eate the Passouer .... (2Ch 30:18)

(それにもかかわらず、彼らは…過越のいけにえを食べた…)

この用例では Adv が文頭に配置されたので動詞の要素が主語の左側に求められ、did がその役目を負っている。すなわち、did は tense marker 以外の要素も強く持っていることになる。このような用例が旧約で他に 2 箇所 (2Sa 12:17, Eze 3:3B)、新約に 1 箇所 (2Th 3:8) ある。

4） did S eat(e)

(36) And did all eat the same spirituall meat: (1Co 10:3)

(皆、同じ霊的な食物を食べ、)

この用例中の all は主語である。なぜ主語の all と Aux が位置を逆転させたのであろうか。この節よりすこし前に all passed thorow the Sea とあり、次に And were all baptized と続いている。all はすべて主語である。all passed の主・述に対して、主・述を繰り返して all were baptized とはせず、

were all として変化を持たせ、その異常性によってこの文全体を際だたせようとしたと考えられる。それを模倣して、all did eat を did all eat に変えたと推測できる。そうであれば、all 自体が did を求めたのではなく、did eat というひとまとまりのものを were all にそろえて分離したにすぎない。従ってこの類型も 1) の did eate に含めて良いと思われる。この類型はこの例のみである。

上記 1) から 4) のように考察してくると、did eate の類型として考えて良いと思われるのは合計110例ということになり、 1) で示した90%を越えて95%弱になる。また、eate の過去形のすべて、すなわち、ate 形 3 例と迂言形116例を合わせて119例中110例 (92%強) が did eate という unit を構成している。結局、eate の過去形は迂言的方法による did eate によるのが原則になっていると言える。

3.9 受動文

eat(e) の過去分詞は表 1 で示したように105例ある。その内訳は完了相構文で64例 (旧約53+新約11)、受動構文で39例 (旧約38+新約 1)、受動の形容詞 2 例 (旧約 2) である。受動文を 1 例見よう。

(37) Unleauened bread shall be eaten seuen dayes: (Ex 13:7)
(酵母を入れないパンを七日の間食べる。)

過去分詞の左側に配置される受動構文構成要素の Aux は be 助動詞意外にはない。

3.9.1 受動文の行為者

受動文39例の内、行為者 Agent を明示したものは新約の 1 例しかない。

(38) ... , and hee was eaten of wormes, ... (Ac 12:23)
(ヘロデは蛆に食い荒らされて息絶えた 。)

この用例では Agent は前置詞 of によって導かれている。この of の使用は Tyndale 以降 The Revised Version まで引き継がれている。

前置詞によらず、形容詞化された eaten の複合語の要素によって Agent を表示するものが 1 例ある。

(39) And hee, ... consumeth, as a garment that is moth-eaten. (Job 13:28)
(だれでもしみに食われた衣のようになり/朽ち果てるほかはありません。)

4 連 語 (Collocation)

4.1 動 詞

eat(e) と結びつく動詞はどのようなものがあるかを次の表によって示そう。

表 7　eat(e) と動詞の連語

連語の類型	旧約	新約	小計	合計
eate (,) and drinke	22	10	32	59
eating (,) and drinking	6	5	11	
to eate (,) and to drinke	8	1	9	
eateth and drinketh	0	3	3	
eaten and drunken	0	1	1	
eaten and drunke	0	1	1	
eate (,) nor drinke	0	1	1	
eate or drinke	0	1	1	
eat and be/were Adj	2	0	2	
eat, and live	1	0	1	
eateth and wipeth	1	0	1	
eate and worship	1	0	1	
arise, and eate	3	0	3	4
rise and eate	1	0	1	
kill (,) and eate	1	1	2	
slay and eate	0	1	1	
buy and eate	1	0	1	
roste and eate	1	0	1	
take and eate	0	1	1	

表 7 が示すように eate と結ぶ頻度が高い動詞は drinke であることがわかる。更に、eat(e) の左側で動詞が結びつく例は少ないと言える。

4.2 目的語

eat(e) はどのような目的語の名詞・代名詞などと結びつきやすいのかを次の表の頻度数が示している。なお、eat(e) of（後述）も目的語を取る動詞として扱ってある。また、表中には頻度数が旧約・新約合わせて 5 以上のものを載せ、これよりも少ないものは表の下部に列挙する。

表8　eat(e) の目的語

目的語	旧約	新約	合計
bread	85	20	105
it	51	5	56
flesh	39	9	48
thing(s)	21	8	29
fruit(s)	23	2	25
thereof	22	2	24
them	19	0	19
that	16	2	18
meat(e)	8	2	10
blood	10	0	10
fat	8	0	8
him	8	0	8
Manna	3	4	7
nothing	2	5	7
passouer	1	6	7
grasse	6	0	6
tree	5	1	6
these	6	0	6
grape(s)	5	0	5
herb(s)	4	1	5
offering(s)	5	0	5

頻度4　food, portion, venison;

頻度3　beasts, corne, good, hony/honie, mee, sacrifices, what;

頻度2　all, butter and hony, carcaise/carkasse, crummes, doung, encrease/increase, foules, hand, kine, haruest, Iezebel, loaues, morsell, one, people, sonne(s), spoil, straw, roule, store, straw, tithe;

頻度1　ashes, birds, both, butter, children, cluster, dainties, dust, egges, enemies, fathers, fish, flocks and thine heards, floure and honie and oyle, Iacob, inhabitants, labour, lambes, life, little or much, locusts and wild honie, milke, much, nation, ought, part, pastors, pasture, piece, places, pottage, prouender, rammes, remainder, residue, riches, scales, shoulder, sinewe, sinne, such, supper, thee, vine, vineyard, vineyard and Olive-yards, vines and thy figtrees, violence, you, whatsoeuer, wormes;

表8が示しているように頻度数の高いものとして bread, flesh, fruit(s) などが上がってくる。代名詞の it は多くの場合 bread や flesh などの食べ物の代理をしている。thereof も it の内容を含んでおり、食べ物の代用であ

ることが多い。them も食べ物の代名詞であることが多い。that は指示代名詞だけでなく、今日の what にあたる関係代名詞をも含んでいる。「食べ物」の意味の meat(e) は頻度10で、あまり高くない。同じ10の頻度で blood がある。なお、欽定訳には eat(e) blood と同様に drinke blood という表現もある。砂漠を放浪したモーセの民に与えられた Manna は頻度 7 であまり高くない。頻度 6 の tree は eate of the tree のように用いられるが、「木の実を取って食べる」の意味である。頻度数の低い方を見ると、sonne（=son), children, fathers などの家族関係の語があり、驚愕の念を覚えるが、食料が欠乏した時の描写として旧約聖書に出てくる。イスラエルの王妃 Iezebel や Iacob など人名まで「食べる」対象として現れる。

5 成 句 (Set Phrase)

5.1 eat(e) of

eat(e) of は多くの場合、この2語で一つの他動詞として扱うことが出来る。

つぎの受動文はその証拠である。

(1) … : it shall not be eaten of. (Le 19:23)
(それを食べてはならない。)

すなわち、eat(e) of は「前置詞付き動詞」である。詳しく考察すると、この前置詞 of には以下のような意味の違いがある。例文を見よう。

(2) Yes Lord, yet the dogges vnder the table eat of the childrens crummes. (Mar 7:28)
(主よ、しかし、食卓の下の子犬も、子供のパン屑はいただきます。)

この例文の of はいわゆる partitive *of* のうち、of の左側に何も来ない場合にあたる[19]。その意味するところは(2)の場合のように some of のことが多い。eat(e) of の大多数はこの範疇に入る。旧約では81例、新約では15例ある[20]。

(3) Yea, hath God said, Ye shall not eat of euery tree of the garden? (Ge 3:1)
(園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。)

この例文の of は separation *of* であると同時に、some fruit of の意味、すなわち、partitive *of* の意味も持っている。この範疇に入る用例は少ない。旧約に 6 例、新約で 1 例ある[21]。

eate of の of に相当する語がヘブル語原典やギリシャ語原典にある場合と無い場合がある。相当する語がある場合の例を(3)の原典で見てみよう。

(4) לֹא תֹאכְלוּ מִכֹּל עֵץ הַגָּן׃

(the garden tree from every you shall eat not)

מִכֹּל の מִ が of に相当する。

相当する語が無い場合は、釈義上、of を加えて、「部分」や「分離」を明確にしたものと考えられる。

5.2 eat(e) on

(5) … , and he shall eate on the left hand, …. (Isa 9:20)

(左に食らいついても、)

eate on は「噛みつく」bite at の意味だけでなく、文脈から、「体の左側を食いちぎって食する」ことを意味している。なお、ヘブル語原典には hand に対応する語はない。従って、文脈から hand は肉体の「手」の意味ではなく、side の意味であると判断できる。(4)以外の用例は無い。

5.3 eat(e) one's fill

(6) … , and ye shal eat your fill, and dwell therin in safetie. (Le 25:19)

(あなたたちは十分に食べ、平穏に暮らすことができる。)

この箇所を *OED* も採例し、to eat until satisfied の意味だと解説している。加えて、この eat は自動詞の疑似他動詞 quasi-trans. 用法だと判断している[22]。すなわち、your fill を eat の、見かけ上、目的語と考えることができるということである。しかし、次の例を見ると、quasi-trans. ととらえることには疑問が生じる。

(7) … , then thou mayest eate grapes thy fill. (De 23:24)

(思う存分満足するまでぶどうを食べてもよいが、)

この用例では eate の目的語 grapes が存在するので thy fill は目的語ではありえない。すなわち、thy fill は様態 manner を表わす副詞句である。このことは *OED* の名詞の Fill の項[23]で副詞句となることを明確に記している。

尚、(6)のヘブル語原典の該当箇所はつぎのようになっている。

(8) לְשֹׂבַע וְאֲכַלְתֶּם

(to satisfaction and you shall eat)

原典は前置詞を用いた副詞句を使っており、ヘブル語原典は eate one's fill という成句には影響を与えてはいない。なお、(6)や(7)以外に、これらに類似した以下のような他の表現もある。

(9) … : yee shal eat your bread to the full, …. (Le 26:5)[24]
(あなたたちは食物に飽き足り、)

(10) The righteous eateth to the satisfying of his soule: (Pr 13:25)
(神に従う人は食べてその望みを満たす。)

(11) … ; and they shall haue eaten and filled themselues, …. (De 31:20)
(彼 [*sic*] は食べて満ち足り、)

(12) When thou hast eaten and art full, …. (De 8:10)[25]
(あなたは食べて満足し、)

eate one's fill タイプの用例は(6), (7)以外にない。

5.4 eat(e) the labour of one's handes

(13) For thou shalt eat the labour of thine handes: (Ps 128:2)
(あなたの手が労して得たものはすべてあなたの食べ物となる。)

この用例では、the labour を eat の目的語と見れば、labour の内容を Revised Standard Version（以後 RSV）がしているように the fruits of the labour[26] と敷衍して読むことになる。他方、the labour を by labour「労働して」という副詞類と考え eate は自動詞ととらえることも出来る。ヘブル語原典はどのようになっているかを見よう。

(14) יְגִיעַ כַּפֶּיךָ כִּי תֹאכֵל

(you shall eat because your hands the labour)

原典の語順と欽定訳のそれはかなり異なるが、名詞 labour と hands の間に、ヘブル語では名詞と名詞の間の of に対応する語は用いないけれども、英文ではこれを補い、語順を英語の文法に合わせれば、(13)が生成される。結局、eate the labour of one's handes という動詞句は Hebraism であると言える。

5.5 eat(e) one's own flesh

(15) The foole foldeth his hands together, and eateth his owne flesh. (Ec 4:5)
(愚か者は手をつかねてその身を食いつぶす。)

eate one's own flesh「自らの肉を食う」とは何を意味するのであろうか。RSV は欽定訳に準じているので参考にならないが、New International Version は ruins himself (みずからを滅ぼす) とし、Contemporary English Version も Today's English Version も「自分の肉体を食べたくなるほど空腹をおぼえる」という解釈から starve to death としている。*OED* もこの phrase に言及し、「怠惰な人のことを言う」[27] と説明している。ヘブル語原典を見よう。

(16) וְאֹכֵל אֶת־בְּשָׂרוֹ׃

(his own flesh and eats)

この原典を見れば、AV の訳文は原典の直訳であることが判る。また、*OED* によれば、(15)は eat one's own flesh という phrase の初出例である[28]。すなわち、この phrase は英訳聖書から英語に取り込まれた Hebraism であると言える。

6. おわりに

本小論では欽定訳聖書で用いられた動詞 eat(e) の状況を、その振る舞い (behavior) と成句 (set phrases) を中心に考察してきた。得られた主な知見をまとめて、本稿を終えることとする。

1. eat(e) の総出現数は AV の外典を除いた本文中に836である。その内の 80%が旧約部分にある。
2. 綴り字については eat と eate の 2 種類があり、それらの使用に関して文法形式は関係せず、eat(e) が配置される行に e を入れる余裕があるかないかという条件によることが多いが、伝統的な eate に加えて eat が一般化する傾向に便乗した可能性もある。
3. 疑問文や否定文、命令文では伝統的な統語規則によることが多く、Do-support による例は少ない。
4. 仮定法で使われた文法環境は以下のものであった。
lest 節、if 節、that 節 (副詞節)、vntill 節、whether 節、except 節

5．希求法の用例が1例ある。

6．eat(e) の過去時制形は ate もごく少数（3例）あるが、did/didst eat(e) という迂言法で現れる。

7．eat(e) の右側に来て and や (n)or によって結ばれる動詞は大部分が drink とその変化形である。

8．eat(e) の目的語として配置される名詞は bread が最多であるが、「人肉」をも含んだ flesh、食べ物の代辞としての it や thing(s) や thereof が多い。用例数は多くはないが、blood や家族関係を表わす語や人名もある。

9．成句 eat(e) of では partitive *of* の例が大部分である。この of に該当するヘブル語やギリシャ語はある場合も無い場合もある。

10．成句 eat(e) one's fill の one's fill は副詞類 adverbial である。また、この成句 は Hebraism ではない。

11．成句 eat(e) the labour of one's handes 及び eat(e) one's own flesh は Hebraism である。

注

1）*A Jacobean Journal 1603-1606* p. 24.

2）戴冠式は7月25日に Westminster 寺院において行われた。

3）『愛知県立大学外国語学部紀要（言語・文学編）第31号（1999)』

4）*Strong's Exhaustive Concordance* が採例していない De 15:22B を含む。

5）筆者が "KING JAMES NEW TESTAMENT における動詞 *Eat* の文法" の第II節で示した新約部分の頻度数 eat:27、eate:108は誤りで、本小論の表3にあるように26および109が正しい。

6）12例は以下の箇所である。

旧約	Lev 6:16B	Lev 8:31B	Lev 17:12B	Lev 22:11B	Num 18:13
	Deu 12:27	1Sam 1:7	2Kin 4:41	Dan 1:12	
新約	Mat 15:2	Joh 18:28	2Th 3:12		

7）欽定訳原典ではハイフンは = の右肩を少し上げた記号になっている。

8）日本語訳は日本聖書協会『聖書　新共同訳』1993年版による。

9）この例文の終止符（.）については拙論 "KING JAMES NEW TESTAMENT における動詞 *Eat* の文法" で示したように欽定訳の印刷工程上の誤りと考えられる。

10）Jer 22:15.

11）他の2例は Isa 36:16, Isa 55:2.

12) 他の 3 例は J'g13:4, Eze24:17, 1Co 10:28.

13) 1Ki 13:9

14) Es 4:16

15) Ex 34:15, De 20:6.

16) Le 22:14, Ro 14:23, 1Co 8:8A, 1Co 8:8B

17) 2Th 3:12 We command, and exhort by our Lord Iesus Christ that with quietnesse they worke, and eat their owne bread. この用例では、主語が they で動詞が eat であるから、直説法と区別が付かないが、that 節を統率する主動詞が command, and exhort であること、ギリシャ語原典の eat が対応する動詞が仮定法語形であることから、仮定法語形の eat と判断する。

18) 用例箇所は以下の通りである。

did eat(e)	Ge 3:6A	Ge 3:6B	Ge 3:12	Ge 3:13	Ge 18:8	Ge 19:3
	Ge 24:54	Ge 25:28	Ge 25:34	Ge 26:30	Ge 27:25B	Ge 31:46
	Ge 31:54B	Ge 39:6	Ge 40:17	Ge 41:4	Ge 41:20	Ge 43:32A
	Ge 47:22	Ex 10:15	Ex 16:3	Ex 16:35A	Ex 16:35B	Ex 24:11
	Nu 11:5	Nu 25:2	De 9:9	De 32:38	Jos 5:11	Jos 5:12
	J'g 9:27	J'g 14:9	J'g 19:4	J'g 19:6	J'g 19:8	J'g 19:21
	Ru 2:14B	1Sa 1:18	1Sa 9:24B	1Sa 14:32	1Sa 20:34	1Sa 28:25
	1Sa 30:11	2Sa 9:13	2Sa 11:13	2Sa 12:3	2Sa 12:20	2Sa 12:27
	2Sa 19:28	1Ki 13:19	1Ki 17:15	1Ki 19:6	1Ki 19:8	1Ki 19:21
	2Ki 4:44	2Ki 6:29	2Ki 7:8	2Ki 9:34	2Ki 23:9	2Ki 25:29
	1Ch 29:22	2Ch 30:22	Ezr 6:21	Ezr 10:6	Ne 9:25	Job 42:11
	Ps 41:9	Ps 78:25	Ps 78:29	Ps 105:35	Jer 15:16	Jer 41:1
	Da 1:15	Da 4:33	Am 7:4	Zec 7:6A.		(旧約76例)
	Mat 12:4	Mat 15:38	Mat 26:21	Mar 1:6	Mar 2:26A	Mar 6:44
	Mar 8:8	Mar 14:18	Mar 14:22A	Lu 4:2	Lu 6:1	Lu 6:4A
	Lu 9:17	Lu 15:16	Lu 17:27	Lu 17:28	Lu 24:43	Joh 6:23
	Joh 6:26	Joh 6:31A	Joh 6:49	Joh 6:58	Ac 2:46	Ac 9:9
	Ac 10:41	Ga 2:12.				(新約26例)
didst eat(e)	2Sa 12:21	Eze 16:13;	Ac 11:3.		(旧約2例、新約1例)	

19) *OED* s.v. Of *prep.* 45

20)

eat(e):	Ge 2:17	Ge 3:2	Ge 3:3	Ge 3:5	Ge 25:28
Ge 27:19	Ge 2725A	Ge 27:31	Ge 32:32	Ex 12:43	Ex 12:44
Ex 12:48	Ex 29:33B	Ex 34:15	Le 6:18	Le 6:29	Le 7:6
Le 7:19	Le 7:21	Le 7:24	Le 11:8	Le 11:11	Le 11:39
Le 19:25	Le 22:4	Le 22:6	Le 22:7	Le 22:10A	Le 22:10B
Le 22:11A	Le 22:11B	Le 22:12	Le 22:13A	Le 22:13B	Le 22:14

Le 25:22A	Nu 18:11	Nu 18:13	Nu 23:24	De 12:15B	De 12:22B
De 14:8	De 14:9A	De 14:11	De 14:12	De 14:20	De 14:21A
De 28:31	De 20:6	De 20:19	Jos 5:11	Jos 5:12	J'g 13:14A
J'g 13:16	Ru 2:14A	2Sa 12:3	2Ki 7:2	2Ki 7:19	2Ki 18:31
2Ki 23:9	Ezr 2:63	Ne 7:65	Ps 41:9	Ps 141:4	Pr 1:31
Pr 9:5	Ec 5:19	Ec 6:2	Eze 4:9	Eze 44:31	Da 1:13.
eatest:	Ge 2:17.	eateth:	Le 7:18,	Le 7:20.	
eaten:	Ge 27:33,	Le 19:23	1Sa 14:30	Eze 4:14	Job 31:17B
	Jos 5:12	De 26:14.			(旧約 81例)
eat(e):	Mat 15:27	Mar 6:44	Mar 7:28	Lu 22:16	Joh 6:26
	Joh 6:50	Joh 6:56	1Co 10:18	1Co 11:28	Rev 2:17.
eateth:	Joh 6:58	1Co 9:7A	1Co 9:7B.	eating:	1Co 8:4.
eaten:	Ac 12:23.				(新約 15例)

21) Ge 3:1 Ge 3:11 Ge 3:17A Ge 3:17B Ge 3:17(eaten)
De 20:6; Rev 2:7.

22) *OED* s.v. Eat *v*. 4.c.

23) *OED* s.v. Fill *sb.*[1] 1.b Hence used with intransitive vbs. as an adverbial phrase: なお、(6)の用例も Fill *sb.*[1] 1. に採用されている。

24) 他に Ex 16:3.

25) 他に De 6:11, De 8:12.

26) *The Abingdon Bible Commentary* は the fruits of his toil と釈義している。

27) *OED* s.v. Eat *v*. 8.c.

28) *OED* は⒂を採例して 1611 Bible と記しているので、AV を指しているが、BB も殆ど同じ訳文にしている。

Bibliography

〈The Bible〉

Biblia Hebraica Stuttgartensia, (1997) Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart.

Good News Bible, Today's English Version, (1976) American Bible Society, New York.

The Bible in English, (CD-ROM) (1996) Chadwyck-Healey Ltd., Cambridge.

The Bishops' Bible, A facsimile of the 1568 edition. (1998) Elpis Co. Ltd.,Tokyo.

The Holy Bible, A facsimile of the Authorized Version published in the year 1611. (1982) Nan'un-do, Tokyo.

The Holy Bible, An Exact Reprint in Roman Type, Page for Page of the Authorized Version Published in the Year 1611 (1985) Oxford University Press, Oxford / Kenkyusha, Tokyo.

The Holy Bible, Revised Standard Version, (1952) Augsburg Publishing House, Minneapolis.

The Holy Bible, New International Version, (1984) Zondervan Bible Publisher, Grand Rapids.

The Holy Bible, Contemporary English Version, (1995) American Bible Society, New York.

Green, Jay P. Sr. ed. & tr., (1983) *The Interlinear Hebrew-Greek-English Bible*, vol. I～IV, Baker Book House, Grand Rapids.

『聖書』新共同訳（1987）日本聖書協会、東京。

〈Concordance / Lexicon〉

The Oxford English Dictionary, 2nd ed. (1989) Oxford University Press, Clarendon.

Bates, Steven L. & Sidney D. Orr comp. (1978) *A Concordance to the Poems of Ben Jonson*, Ohio University Press, Athens.

Davidson, Benjamin (1974) *The Analytical Hebrew and Chaldee Lexicon*, Samuel Bagster & Sons Ltd., London.

Di Cesare, Mario A. & Rigo Mignani ed. (1977) *A Concordance to the Complete Writings of George Herbert*, Cornell University Press, Ithaca & London.

Spevack, Marvin (1968) *A Complete and Systematic Concordance to the Works of Shakespeare*, vol. 4, Georg Olms, Hildesheim.

Strong, James (1982 repr.) *Strong's Exhaustive Concordance*, Baker Book House, Grand Rapids.

Young, Robert (1971 repr.) *Analytical Concordance to the Holy Bible*, 8th ed., Lutterworth Press, London.

〈References〉

Eselen, F. C., Edwin Lewis & D.G. Downey (1929) *The Abingdon Bible Commentary*, Doubleday, New York.

Harrison, G. B. (1941) *Elizabethan and Jacobean Journals 1591–1610*, vol. IV, Routledge, London & New York.

Mr. William Shakespeare's Comedies, Histories, & Tragedies, A Facsimile of the First Folio, 1623. Routledge, New York / London.